黒毛和種子牛への粗飼料給与は4週齢までに始めましょう

子牛の発育においてほ乳期の飼養管理は特に重要と考えられている。子牛の良好な発育に関して、ほ乳期の粗飼料給与の是非については明らかになっていない。そこで、ほ乳期における粗飼料給与開始時期の違いが子牛の発育に及ぼす影響について調査した。その結果、4週齢までに給与を開始した方が8週齢から給与した場合より良好な発育が得られた。

内　容

黒毛和種人工ほ乳子牛を用い、粗飼料給与開始時期の違いにより４頭ずつ３区に分け１～28週齢まで試験を実施した。粗飼料はチモシー乾草を用い、１週区は１週齢、４週区は４週齢、８週区は８週齢から飽食給与した。濃厚飼料は、12週齢までは人工乳を上限日量2.6kgで給与し、それ以降は子牛用配合飼料を用い、制限給与した（写真）。

ほ乳期間中の粗飼料総摂取量が一定量までは、多い方が12週齢時の体重が大きくなったが、摂取量が多くなりすぎると逆に体重が小さくなった（図１）。

28週齢までの１日あたりの増体量（DG）は、１週区0.94kg、４週区0.93kg、８週区0.88kgであり、８週区が他の区に比較して小さい値を示した（図２）。

１～28週齢の粗飼料の総摂取量は１週区202.9kg、４週区211.2kg、８週区186.8kgであり、８週区が他の区に比較して少なかった（図２）。また、可消化養分総量、粗たん白質及び乾物摂取量についても、８週区が他の区に比較して有意に少なかった（データ略）。

ほ乳期に粗飼料を給与しなかった場合、育成期の発育及び飼料摂取量に悪い影響を及ぼすことからほ乳期には粗飼料は必要であり、１週齢区と４週齢区では発育等に差がないことから、４週齢までに給与を開始すればよいことが分かった。

普及上の注意事項

ほ乳期間中の粗飼料の摂取量が多すぎると発育が抑制される可能性があるため、注意が必要である。

吉田　恵実（北部農技　畜産部）
（問い合わせ先　電話：079－674－1230）

写真　子牛へ飼料を給与している様子

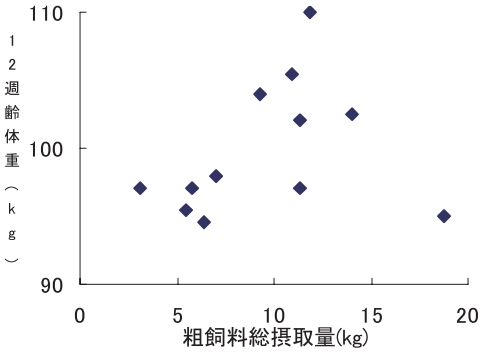

図１　12週齢体重と粗飼料摂取量の関係

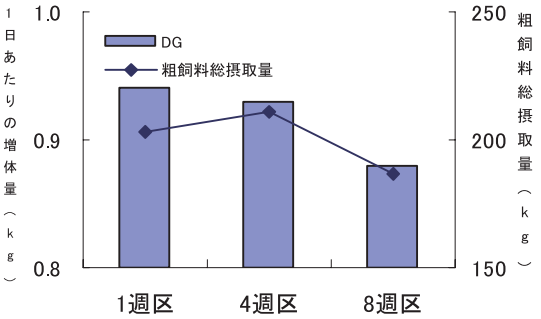

図２　28週齢までのDGと粗飼料総摂取量